

論文の内容の要旨

氏名：河慧柱(ハヘジュ)

博士の専攻分野の名称：博士(芸術学)

論文題名：ファンタジー映画におけるジェンダー・人種・階級表象

－『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』を中心に－

最近の南カリフォルニア大学の Annenberg Inclusion Initiative によると、映画の中でもジェンダーと人種、階級差別が現実と同じように存在している¹。

『ハリー・ポッター』と『ロードオブザリング』も例外ではなく、多くの研究者からジェンダー、人種、階級の差別があると非難を受けている。ジェンダーの側面では、女性キャラクターが受動的でステレオタイプの役割だけを遂行するという事実である。人種の面では、作品の中に登場する良い人は白人、悪い人は黒人に描写し、人種差別主義が深く根付いていることである。そして、階級の面では、二つの作品の社会構造は、強力な中央権力と富によって区分されていると指摘している。しかし、このような批判は原作を中心に行われており、映画を対象とする研究はまだ不十分である。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、小説を映画化し、多数のシーンとキャラクターの役割が縮小または強化された。このため、ジェンダーと人種、階級の面で再現方式も変更されていると考えられる。

本論文は、このような点に着目して、映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の中で、ジェンダー、人種、階級がどのように映像的に描かれているのか、また、原作とはどう違うのかを明らかにし、今後のファンタジー映画に必要な方向性を見つけることを目的にする。

本論文においては、先行研究の成果と問題点を踏まえ、映画を中心に、ジェンダー表象は、ジェンダー・パフォーマンスの観点から登場キャラクターのジェンダー・アイデンティティを明らかにした。また、人種表象は、ポストコロニアル観点から白人至上主義と非白人の周辺化などについて考察し、階級表象は、主にマルクスとブルデューの階級理論に基づいて階級構造と階級差別の要因を分析した。

本論文の構成は次のとおりである。

まず序論では、本論文の研究背景である映画産業と映画の中の差別について述べるとともに、本論文の問題意識と研究目的を明らかにし、本論文の研究方法与論文の骨組みを提示した。

第1章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー、人種、階級に関わる先行研究を概観した。先行研究を検討し、以下の3点についての結果が得ら

¹ Smith, Stacy L., Marc Choueiti, Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel Choi. Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018, Annenberg Inclusion Initiative, 2019.

れ、それを考察した。①ジェンダー関連のほとんどの先行研究がフェミニスト的異性愛規範性の観点からの研究に限られている。②ジェンダー、人種、階級に関連する先行研究の大半が、原作に限られている。③ジェンダー、人種、階級を分析するための基準が明確でない。

第2章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における主なキャラクターのジェンダー・アイデンティティをジェンダー・パフォーマンス性の観点から整理分析し、ジェンダー転覆の可能性にも注目しながら考察した。

その結果、映画の中の、各キャラクターのジェンダー・アイデンティティは、「魔法世界」と「中つ国」という空間性、キャラクターたちの特殊性（年齢、善人と悪人など）に応じて、不変的で、固定的なものではなく、パフォーマンス性に構築されていくことを明確にした。また、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』には、家父長制の批判的な視点が盛り込まれていることを明らかにした。二つの映画はジェンダーにおける支配的イデオロギーを無条件には受容せず、部分的にはあるが強い抵抗もあった。特に、『ハリー・ポッター』でのハーマイオニーとジニー、『ロード・オブ・ザ・リング』でのエオウィンとアルウェンなど女性キャラクターなどを通じて、既存の伝統的な家父長制下での受動的で、補助的な女性性とは異なる強い姿を見せてくれた。

しかし、前の議論と対立するものであるが、女性キャラクターたちの活躍と成功が男性的領域、すなわち、戦場でのエオウィンの活躍、クイディッチのゲームでのジニーの活躍など男性的能力を発揮する場合にのみ可能であるという点では、家父長制の理念の批判から自由ではないことがわかった。特にエオウィンは男装を介して行われたという点は既存のジェンダー規範や異性愛中心主義をさらに固定化させることについて論じた。

一方、二つの作品に現れるジェンダー表象の違いは、『ハリー・ポッター』では、クィア問題の特別な言及がないが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、多数の学者によって、フロドとサムの関係はクィア関係で認識されることがわかった。しかし、本研究では、彼らの関係がブロマンスに近い点を主張した。また、『ハリー・ポッター』は、『ロード・オブ・ザ・リング』に比べて「母性愛」が大きく強調されていることが確認できた。特に、モリーがベラトリックスとの戦いで勝利したのは、子供たちに対するモリーの「母性愛」によるものであったことを示した。

第3章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する多種多様な人種がどのように、映像的に描かれ、どのような関係を形成しているのかを考察した。

二つの映画は登場人物たちの人種的な背景について言及を避け、多元主義を標榜している。多元主義は、人種差別とは違って、ある人種の優位性を主張することはない。しかし『ハリー・ポッター』では、肌色の異なる人種間の争いは描かれてはいないものの、有色人種を見えない存在にしていることを明確にした。『ロード・オブ・ザ・リング』も、表面的にはエルフ、人間、ホビットやドワーフなどが調和して多元主義のように見えるものの、実質的には白人たちの多元主義であり、有色人種を含む完全なものとは言えないことを明らかにした。

『ハリー・ポッター』の魔法世界では、善人も悪人も白人俳優達が演じていて、人種差別の問題は起こらないが、『ロード・オブ・ザ・リング』では、善人は白人、非白人は悪人と言うよう

に構成されていて、人種差別の問題が提起される。『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」は、闇の勢力が住む東部地域と、サウロンと反目する自由の民が住む西部地域に区分されることがわかった。つまり、悪側の東部地域に有色人種が住み、善側の西部地域に白人たちが住んでいて、問題化されることが確認できた。

第4章では、マルクスとブルデューの階級理論に基づいて、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における階級表象を考察した。

その結果、『ハリー・ポッター』では、同じ人種（純血）であっても、階級差別が存在するが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、同じ人種の中では、階級差別がないことがわかった。『ハリー・ポッター』の場合、マルフォイ家に代表される純血主義魔法使いたちは、その地位と富を誇示しながら、上流階級の階級意識を表す。『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」も階級社会であるが、善側の場合、富の格差はあるものの、富の格差による差別は存在しなかった。これは、主従関係フロドとサムの関係から確認できた。しかし、悪側の場合には、サウロンとサルマンの強い権力による差別が存在した。

二つの映画の共通の特徴は、原作と比較して階級を扱う方式が似ている。つまり、二つの映画は原作より階級差と差別が縮小された点と、階級問題が、英国の帝国主義イデオロギーと無関係ではないことを明らかにした。

『ハリー・ポッター』では、この高貴な血統（Englishness）を持つだけで、被支配者たちの階級は宿命とみなし、彼らに対するある程度の強制は正当化されると信じていることがわかった。そして、『ロード・オブ・ザ・リング』での指輪戦争は、既存の政治体制の擁護と王政の復古に帰結されており、英国の根強い階級体制が安定した理想的なモデルとして認識されるようにする。このように二つの作品には、作家が意識していたか、意識していなかったかに関わらず、いずれの場合においても英国帝国主義イデオロギーが含まれている。

結論では、これまでの検証結果を総括するとともに、二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の問題点を指摘し、その問題に対してどのように向き合っていくかを提言した。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、ファンタジーという架空の夢物語であるのに、人間あるいは人間社会の歴史的な歪みや、現代そのものの問題が取り込まれている。

社会規範として成立しているジェンダー規範が、ジェンダーにもとづく偏見や、不平等をもたらすとすれば、そのジェンダー規範は、解体されるべきものである。また、人種と階級に対する人々の態度や行動が、誰かに不利益をもたらすとすれば、その態度や行動も変わらなければならない。

ジェンダーは、固定されたものではなく、流動的であるという事実から、ジェンダー・ブラインド・キャストイング（Gender-blind Casting）の方向性と、二つの映画における主要キャラクターが、主に白人の俳優たちによって演じられることから、カラー・ブラインド・キャストイング（Color-blind Casting）を掴むこともできた。